

社會部報告第六五號

大阪市住宅年報

(昭和元年)



大阪市社會部調查課編纂

り
湯寄贈本

145-27

大阪市住宅年報目次（昭和元年）

一 序 説	一
二 爭議顛末	四
三 爭議統計	五
四 結 語	二九
五 參考資料	三三
A 市營住宅の概況	三三
B 土地會社の概況と郊外地價	三三
C 労働者階級の住宅統計	四〇
D 六大都市に於ける不良住宅地區の沿革	一五

一 序 説

本年報に於いては從來専ら刻下の住宅問題の經過趨勢をのみ紹介し來りたるが現在に於ける現象をよりよく了解するためにはその由つて來るところの過去に於ける過程を知ることが最も必要とする。即ち所謂溫故知新の意味に於いて斯問題の過去を回想することも強ちに無意味ではあるまいと思惟するが故に少しくこの方面の史實を回顧して見たいと思ふ。

併しながら我國民は古來住居に對する慾望に乏しく従つてこれを等閑視したるためかこの種の問題に關する文献資料は實に稀である。本市も亦同様の状態にあつて水災又は火災時に於ける一時的救済施設及び人口住宅等の概數に關する極めて斷片的なる記録を見出し得るに過ぎない。従つてこの方面の回顧を志すものの總てはここに多大の困難を滿喫するのである。

A 明治維新以前

往昔に於ける仁徳天皇の高津宮は別として近世史上に現はれたる本市は一種の寺院都市とも言ふべき形態に於いてであつた。即ち本願寺光佐の石山城の門前市として發達したものである。折柄全國討平の大業に従事しつつあつた織田信長の來攻に遇ひ苦戰多年終に天正八年四月九日光佐退城し次いで

年次	人口	西暦	年次	人口	西暦
明和二年	四三、五九	一七五五	安永六年	四九、七五	一七八五
同三年	四三、五三	一七五六	同七年	四六、〇二	一七八六
同四年	四三、七三	一七五七	同八年	四六、七五	一七八七
同五年	四三、五二	一七五八	天明九年	四八、七五	一七八八
同六年	四三、三九	一七五九	同十年	四八、七五	一七八九
同七年	四三、九七	一七六〇	同十一年	四九、七三	一七九〇
同八年	四四、〇九	一七六一	同十二年	四九、七三	一七九一
同九年	四四、四三	一七六二	同十三年	四九、七三	一七九二
同十年	四四、〇六	一七六三	同十四年	四九、七五	一七九三
安永元年	四四、〇六	一七六四	同十五年	四九、七五	一七九四
同二年	四四、五五	一七六五	同十六年	四九、七五	一七九五
同三年	四四、八六	一七六六	同十七年	四九、七五	一七九六
同四年	四四、六九	一七六七	同十八年	四九、七五	一七九七
同五年	四四、五二	一七六八	同十九年	四九、七五	一七九八

備考。明治元年以外の人口は山口正氏著「都市生活の研究」による。

即ち寛文五年に二十六萬八千七百六十名を算したる本市人口は其の後年と共に増加し初めて全國的に人口調査の試みられたる享保六年には三十八萬二千四百七十一名となり元文四年には四十萬三千七百二十四名に達し寛文五年より丁度百年後の明和二年には明治維新以前に於ける本市人口の最高記録たる四十二萬三千四百五十二名を算したのであつた。

かくて本市人口は寛文五年より明和二年に至る前後百ケ年間に總數十五萬四千六百九十二名を増加したるを以つて毎年平均一千五百四十七名宛増加し來つたこととなり従つて戸數に於いては今假りに

毎戸五名とするならば明和二年に於ける總戸數は八萬四千六百九十戸となり寛文五年以來毎年約三百九戸宛増加したることとなる。而して明治維新以前に於いては戸口調査に當つて武士及び非人等を除外するを常としたるを以つて實際に於ける戸口は共に今少しく多かりしものと考へねばならない。

其の後人口には大なる増減なく安永の末年に於いても依然三郷六百町四十萬人と記されてゐるのである。併しながらこの状態は長くは續かなかつた。即ち本市人口の最多數を示したる明和二年より僅かに十八年を経たる天明三年に至りて大飢饉起り餓殍道に臥すの慘狀を現出し、ために翌天明四年には元文四年以來四十五年間維持し來つた四十萬臺の人口數を割りて忽ち三十八萬四千三百九十五人に減じ爾來幕末多事の影響に依りてかこの天明四年を轉期として人口は漸減の傾向をつづくることと十八年間に及びこの間毎年平均一千二百二十七名宛總計十萬三千八十九名を減じて明治元年には僅かに二十八萬一千三百六人を算したるに過ぎない。

而して記録の示すところに依れば本市の町數六百、人口四十萬を算したる安永當時に於いて江戸は町數千六百、人口約五十萬を有したるを以つて武士を人口計算より除外するを常とせし當時に於いて特に武士の多かりし江戸の人口實數がこの記録よりもより多數なりしことは想像し得るも尙その密度は本市の方が一層甚しかりしかに思はれる。

次に施設の方面であるが、我國に於ける所謂社會事業の起源は遠く既に神代にその端を發しその後博愛慈善を信條とせる佛教の渡來と共に大いにこの方面の發展を助長するに至つた。就中聖德太子が

四天王寺を荒陵に建立してこの方面の施設に鋭意せられたる事蹟は過去に於ける最も偉大なる實例であると同時に又實に我國に於ける救済施設の濫觴をなすものである。この意味に於いて社會事業史上に有する本市の史的意義は實に重大なるものがある。

かくの如く古い過去に於ける救済施設は殆んど宗教と密接不離の關係を保ちつつ進んで來たのであるが其の後徳川時代に入るに及んで漸くこれを社會政策的見地から企畫する様になり窮民救助の法を定め棄兒行旅病者の保護を命じ又突發的天災地異に際して應急的救護を行ふ等純然たる社會的救護施設となり年序を経るに伴ひてその制度と方法とに變遷を見つつ明治に入り大正に移つたのである。

要するに如上の事例より見て從來の施設は専ら消極的救済的施設に過ぎなかつたと言ひ得る。

居住に對する施設も亦勿論この例外を爲すものではない。併しながら徳川時代に於ける各種の救済施設が殆んど全く消極的であり一時的であつたなかに唯一つ難澁人の居住施設のみは勿論消極的であつた點に於いては他の諸施設と同様であつたにしてもその性質上稍々恒久的なものと見ることが出来る。

たとへば寛文六年十二月に於ける新町邸の大火は大阪全市の約四分の一を焦土と化したため市民の困惑想像に餘るものがあつて施米施錢等に依つて兎も角も一時の急を救つたのであつたが而も住むに家なき徒は久しきに亘つては漸次悪化の傾向を生じたるを以つて當時の町奉行石丸石見守は一方に於いて夜盜の警備を嚴にすると同時に道頓堀宗右衛門町、同立慶町及び長町一二丁目に木賃宿百六軒

を許可し是等の難澁人を低廉なる費用を以つてここに收容し正業に就き得るの道を開いたために或程度まで細民の悪化を防ぎ得たかに思はれる。其の他妙知焼をはじめとして大火の度毎にお救小屋を建設して罹災民を收容するを常とした。

當時庶民にして大阪市内に借家せんとするときは所謂家請人を要したるを以つて若し市内に家請人たるべき親戚故舊等を有せざるときは家屋の賃借は勿論家主より家屋の明渡を要求せられたるときに於いても少なからざる不便不利ありたるを以て享保十七年正月始めて家請人仲間五十三名を許可し判錢を徴して借家人身元引受業を營ましめ龜井町（現在の東區平野町五丁目）に家請會所を建て惣名代一名を置き家屋明渡に關する家主との交渉に當らしめ又天滿助成地藏寺屋敷（現在の北區木幡町）に表口四間奥行十八間半の引取小屋を建て家屋明渡を命ぜられたる借家人又は老病者にして他に引取人なき者を收容することとした。

即ちこの一事實よりしても當時に於いて既に借家生活者増加し家屋明渡等今日の所謂住宅問題の頻發しつつありしことを知ることが出来る。

家請人が請判するに當つては豫め借家人の親族或は故舊をして下請に立たしむることを習とし家主より家屋明渡の請求ありたるときは家請人が立會つて該家屋の引渡をなし家賃の滞納ありたるときは家請人これを辨償し又一方引取小屋に收容せし者を扶養する責任をもつてゐた。而して家請人はこれ等の費用にあつるために表借家人の内相當の生活を營むものよりは一ヶ年百文乃至二百文を裏借家人

よりは八十文宛の判錢と稱するものを三五七九、十二月の五回に分徴することとなつてゐたのである。次に天保八年二月大鹽の亂の兵火に依つて多數の家屋燼滅したる結果借家の拂底を來したるため家屋の賃貸借について幾多の紛糾を生じたるのみならず質入したる家屋の焼失によつても各種の紛争が生じ又一方この情勢に乗じて家屋の賃借希望者がお救小屋に居たことを口實として貸與を拒絶するが如き家主も出で當時としては可なり面倒なる住宅問題が持ち上らんとしたのであつた。この形勢を看取した奉行所に於いては同年六月惣年寄三郷家請人惣代並に在郷家請人惣代に諭して家請人は身元引受人なき借家人を保證し宜しくこの機會に於いて其の本質を發揮すべく町々も亦よくこの旨を諒すべしと諭示した程であつた。

其の他元祿時代には非人小屋の建設があつた。小屋は一間に一間半の建物にして宮崎町（現在の南區田島町の北半）西裏百二十三坪七合五勺の地に二十軒、生駒町（現在の南區空堀町）の西方二百八十二坪の地に六十三軒、尾張坂町（現在の西區堀町）南裏百九十三坪の地に四十軒を設けその費用は關所銀の中から支出したのであつた。元祿四年調査の三郷非人の數は男女合計千二百六十八人ありたるが其の後（享保年間か）の調べにては更に甚しく増加して約六千人を算し内二千八百人は大阪の者にしてその内二千人は小屋に住んで居た様である。

又安永二年には高原小屋を設けて行倒人を收容する所としたのである。この小屋はその詳細は不明であるけれども手鑑の中に「南瓦屋町續き元土取場の内に有之高原溜所二反九畝十歩右同斷非人小屋

一ヶ所二反三畝右同斷一ヶ所九畝二十八歩」とあるのがこれであらうと思はれる。

併しながら既に前にも述べし如くこれ等施設の總てを通じて其處には何等積極的な或は防貧的な施設として數ふべきものがなかつたのである。而してこの流風は明治に入つても尙容易に脱することが出来なかつた。

B 明治維新以後

明治維新に依つて我國政治組織に一大變革を來したことは勿論なるが更に經濟組織に至つては全然創造ともいひ得べき激變を受けたのであつた。この一大變轉期に當つて本市の受けたる影響は東京のそれに比しては較ぶべくもなかつたけれども舊制舊慣の徹底的破壊のあとに新生命を開拓することは容易ならざる大業であつたに相違ない。このことは過去約二百年間に於ける本市人口の最低記録といふべき明治元年の二十八萬臺を明治十二年に於いても依然脱し得なかつたのみか明治六年には却つて二十七萬一千九百九十二名にさへ減じたることに依つても知ることが出来やう。

併しながら形勢の位置を占め殊に従前本邦商業の中心地なりし本市は本市に取つて寧ろ好都合であつたとも言ひ得べきこの變革の後には依りて依然何時まで沈滞して居る筈はなかつた。即ちこの十餘年間

は新時代への華々しき門出の準備時代であつたと見るべきであらう。かくてこの沈滞期を通過したる本市は時勢の進運に乗じてその經濟都市としての特色を發揮しつつ

驚異すべき發展振りを示したのである。而してその當然の歸結として人口は激増し明治十二年に於いて僅かに二十八萬七千九百八十四名なりし本市人口は同十五年には三十三萬二千四百二十五名となり同二十年に於いては早くも従前に於ける本市人口の最高記録たる明和二年の人口を突破して四十二萬六千八百四十六名に達したのである。以來時に消長はあつたにしてもこの趨勢は今につづきその間四回の市域擴張と相俟つて大正十四年末現在十一方里七分八厘、四十四萬一千八百八十一戸、四十八萬三千九百九十世帯、二百一十一萬四千八百四人を有する本邦第一の大都市となり了せたのである。今試みに近年に於ける我國勢の一轉期たる日清戰役終了の明治二十八年以來の人口及び世帯等の概數を示せば左の通りである。

年次	面積	人口	世帯數	備考
明治二十八年	〇九、九	四八、六八	六、四六	第一次市域擴張
同 三十年	三六	五八、六五	一五、七三	
同 三十九年	三六	一、二七、五二	二六、五八	第二次市域擴張
同 四十年	三七	一、二七、二六	二七、三〇	
同 四十四年	三七	一、二七、六〇	二九、〇三	第三次市域擴張
大正元年	三七	一、三三、九四	三六、七二	
同 九年	三七	一、五三、九三	二六、七二	
同 十三年	三七	一、四三、五〇	一	
同 十四年	二六	二、二四、八四	四八、九〇	第四次市域擴張、第二次國勢調査

備考 大阪市統計書による。

かくて大正九年以前のもは戸籍簿上の算定數にして果して實際に適合せるか否かは充分信頼することが出来ないけれども兎に角明治二十八年より大正十四年に至る過去三十年間に於いて本市は面積十一倍九分、人口四倍七分、世帯數七倍五分に増加擴大したることとなる。換言すれば過去三十年間本市は間斷なく毎年平均面積〇三五方里人口五萬四千二百五人、世帯數一萬三千九百八十四宛を増加し來つたこととなる。

次に社會的施設殊に居住施設に於いては維新以來政治的又は經濟的方面の鉤爛たる躍進を示したるにかかはらず依然舊套を脱せずして明治十八年の大洪水をはじめ同四十年代の南北の大火等の大災時に於いて夫等の罹災者を一時的に收容救済せしに過ぎず所謂救恤事業以外慈善事業以外今日の所謂社會事業に於いて見るが如き積極的な防貧的な施設は全く之を見ることが出来なかつたのである。而してこの傾向は大正の初期に於いても亦何等格別なる變化を見なかつた。

併しながら時勢の推移は次第に社會組織を複雑多岐ならしめ到底從來の救貧的施設のみに満足することを得ざる状態となり搗て加へて近年に於ける物價の急激なる騰勢と西歐文明の餘殃とは甚しく人心に衝動を與へてこれが緩和誘掖は都市政策上喫緊の要務となるに至つた。

この形勢を看取した本市當局はこれが對策に就いて腐心し深く調査考究を遂けつつあつた折柄大正七年夏に至りて突如として起りし所謂米騒動は最早調査考究の間暇を許さずここに市内同憂の士は奮起して大阪市救濟事業後援發起人となり檄を四方に傳へて義捐の資を募りその全額をあけてこれを本

市に託せらるるに判り始めて計畫の具體化となり消極的救貧的施設より積極的防貧的施設へと轉進し得たのである。

即ちこの結果他の幾多の積極的社會施設と共に共同宿泊所又は市營住宅（住居の整備と関係あり）等の恒久的防貧的居住施設を見るに至つた。それと同時にこれ等施設の管理機關として救濟係に次いで救濟課が設けられ大正九年には時勢の要求に従つて社會部の新設となりその中に住宅係を置いて専らこの種施設の管理經營に當り特に貸家貸間紹介の係を設け進んで一般貸家貸間の需給の圓滑につとむることとなつたのである。

凡そ住宅施設の社會政策的意義は必ずしも一時的の住宅難に備ふるに止まらず住宅の質的改善及び生活能率の増進即ち社會生活の健全なる進歩發達を期することによつて大いに意義づけられるのである。かくて陣容を整へたる本市はこの主旨の貫徹に向つて不斷の努力をつづけつつあるけれども尙未だ積極的にこの問題を指導し左右する域には達し得ない現状に在る。

最近に於ける本市住宅問題の趨勢は大正四年より同八年に至る前後五ヶ年に亘る世界大戰に依つて我國經濟界が未曾有の活況を呈し各種産業の頓に勃興したる結果其處に急激なる人口の都市集中起り忽ちにして住宅の拂底を招來し住宅難の聲愈々轟しく世の視聽を聳たしむるものがあつた。即ち大多數市民は住むに家なき所謂量的住宅難即ち絶對的住宅難に陥つたのである。而してその最高潮に達したのは大正七八年の頃であつた。

併しながらかかる好況は何時までもつづくものではない。世界大戰の終熄したる翌大正九年には早くもその反動來り我國經濟界は一大恐慌に直面したのである。爾來不景氣は漸次慢性的となり經濟界は甚しき沈衰に陥りその當然の歸結として産業振はす退市者は増加し密集生活は愈々甚しきを加へたる他方物價勞銀の低落は投資の對象としての貸家建築を有利ならしめ従つて資本の家屋化を招致し多額の資本はこの方面に投ぜらるるに至り各種住宅の建築盛に起りたると兩々相俟つて量的住宅難は忽ちにしてその影を潜め却つて驚ろくべき多數の空家をさへ生ずるに至つた。即ち次表は這間の消息を最も雄辯に物語る。

年次	總戸數	同増率	空家數	同増率	總戸數千戸	人口	同増率	世帯數	一戸當世帯數
大正三年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同四年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同五年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同六年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同七年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同八年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同九年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同十年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同十一年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同十二年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同十三年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三
同十四年	三、四一、四〇〇	一、〇〇〇	一、七九、一〇一	一、〇〇〇	八、三六	一、四四、五八六	一、〇〇〇	三〇、三六八	一、四三

備考 大正九年統計書による。大正九年及び同十四年の人口及び世帯數は國勢調査の結果にしてその他は戸籍簿による推計數とす。大正十四年度には市域擴張あり。

即ち好景氣の頂點ともいふべき大正八年は亦量的住宅難の極點にして同年末現在空家数は僅かに總戸數の一厘五毛三百四十一戸に過ぎざりしも爾來年と共に緩和し同十四年末に於いては總戸數の三分八厘八毛一萬七千百六十一戸を數へ所謂普通の空家率たる三分を超過すること八厘八毛に及び人々は漸くにして量的住宅難の脅威を脱することを得たのである。

され従つて次表の如く雇入數は解雇數よりその減少率甚しく他方職を得ることは愈々困難を極むるに至つた。

年次	求職者數	紹介者數	就職者數	求職率(%)	就職率(%)	紹介率(%)
九年	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
十年	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
十一年	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
十二年	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
十三年	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
十四年	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

備考 當課労働月報に依る。

備考 本市職業紹介所成績による。

備考
本市職業紹介所成績による

而してその結果大正十四年十月一日現在の失業統計調査の結果に徴すれば月收二百圓以下の給料生活者及び各種労働者總計五十萬一千二百七十名中一萬八千九百九十名即ち約三分六厘が失業苦に悩むこととなつたのである。剩へ近年に於いては生活必需品は漸騰を示せるに労働者の實收賃銀は却つて減額甚しく、しかも家賃はさしたる低落を示さざることは次表の通りである。

年次	十二	十三	十四	備考
生活必需品價指數	100	112	125	當市貸家貸問紹介所調査
實收貸金指數	100	106	107	當課調査
一疊當家貸指數	100	103	104	當課調査

かくて如上の諸原因が因となり果となつて多數の借家人は生計難を招來して一方にかかる多數の空家を見つつこれに住むことを得ざる悲慘なる經濟的住宅難に直面するの餘儀なきに至つた。即ち量的住宅難は此處に經濟的住宅難へと轉移して一層深刻に大多數市民を困惑せしむることとなつたのである。

C 本期に於ける趨勢

近年に於ける住定問題が純然たる經濟的住宅難に起因することは前述の通りであるが大正十五年一月以降同年十二月即ち昭和元年十二月に到る本期住宅問題も亦依然この埒外に出づるものではない。併しながら經濟界の沈衰が己に慢性的傾向を帶ぶると共斯の種經濟的住宅難も亦或程度の止むなき

落ちつきを見せたるかに思はれる。この時に當りて不良住宅問題に關する世論の漸次露しきものあるはやがて質的住宅問題への轉向を意味するものではあるまいか。人間の慾望が限りなきものである以上質的住宅問題が斯種問題の核心をなすに至ることは即ち既に或意味に於ける住宅問題の解決を意味するものと言はねばならない。

併しながら刻下の情勢は依然經濟的住宅問題に終始しその僅かに示したる落ちつきこそは經濟的悲境の或極點に到達せることを暗示するものであつて經濟的住宅問題は常に最も熾烈なる燃焼の過程に在るものといふことが出来る。

即ち如何に悲境の甚しきかは常に經濟界の消長に反比例して増減する退市人員の激増に依つてもその一斑を窺ひ知ることが出来るやう。

	退市人員			入市人員			差引
	鐵道	汽船	合計	鐵道	汽船	合計	
前期	八、九六、四〇〇	八、八、三〇〇	一七、八四、七〇〇	八、八九、六〇〇	五、五、九〇〇	一四、四五、五〇〇	三、三九、二〇〇
本期	三、二五、四〇〇	六、六、三〇〇	九、九一、七〇〇	一〇、六、九〇〇	三、九、三〇〇	一四、六、二〇〇	一、二五、五〇〇

備考 本市統計書に依る。

この表は本市各驛及び各汽船發着所に於ける乗降者數より算出したるものなるが前期に於いて差引九萬二千餘に過ぎなかつた退市人員が本期に於いては三十萬近くの驚ろくべき激増を示したることは退市者激増の有力なる一證左といふことが出来る。

而して他面多數市民は刻下の生計難に對應するため傳統的にその慾望に乏しき住宅費の節減を企て或は自ら一戸を捨てて借間生活に入り或は又逆に自己住宅の一部を貸間とするなど横の生活より縦の生活に移る者の益々増加しつつあることは左表の明示するところである。

	貸家			貸間		
	前期	本期	十四年百に對する元年の比	前期	本期	前期百に對する本期の比
供給	一、四、四〇〇	五、三、九〇〇	三三三	一、二、八〇〇	二、六、四〇〇	二〇六
需要	五、〇、一〇〇	四、六、七〇〇	九三	五、四、四〇〇	五、〇、一〇〇	九二

備考 本市貸家貸間紹介所成績に依る。

かく貸家貸間共にその供給を増加せるもその率は前者の勝れるに反し需要は後者の増加せるにかかはらず前者は却つて減少を示せる事實は前述の消息を力強く表明せるものと言はねばならない。

しかも不景氣の徹底すると共に建築材料及びその勞銀は著るしく低落したのである。而してその低下率の勞銀に於いて特に甚しきものあるは左表に依つても明らかに知り得る通りであるがこの事實は他面それ等勞働者の収入減を示すものと言はねばならない。

	木材	煉瓦	疊表	洋釘	鐵材	セメント	平均
前期	一〇一	三、四	三、九	一、四	一、四	一〇〇	一、八
本期	一、五	三、四	三、九	一、八	二、三	一〇一	一、六

備考 本市統計書に依る。セメントの他は大正元年を百とす。

前 期	大 工	左 官	建具職	石 工	煉瓦積	瓦葺職	平 均
本 期	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
前 期	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六

かくて建築は有利に行はるることとなり従つて家屋の新築取毀等が盛に起り住宅の供給は益々潤澤となるに至つた。

棟 数	新 築	取 毀	増 加	新 築	取 毀	増 加	新 築	取 毀	増 加
本 期	五、六四	一、五三	四、一一	五、六四	一、五三	四、一一	五、六四	一、五三	四、一一
前 期	六、九六	三、九三	三、〇三	六、九六	三、九三	三、〇三	六、九六	三、九三	三、〇三
前期百に對する	三三	一、二	六	三三	一、二	六	三三	一、二	六

即ち總てに於いて取毀の増加著るしきは改築の多く行なはれたることを意味し又増加率が前期に比して戸數延建坪共に増大せるに棟數のみは却つて減少したる事實よりして長屋建の増加しつつあることが推察せられる。

以上述べ來りたる供給増加需要減少の二大原因が相重つて空家の増加愈々甚しく本期末に於いては全市を通じてその數一萬九千三百三十九戸に達したのである。

總 戸 數	前 期	本 期	差 引 増	前期百に對する本期の比
總 戸 數	四、八二	四、九六	一、四七	一一四

現 住 戸 數	空 家 數	現 住 戸 數	空 家 數
四、七〇	一、七〇	四、七〇	一、七〇
三、〇〇	一、九六	三、〇〇	一、九六
三、〇〇	一、九六	三、〇〇	一、九六
三、〇〇	一、九六	三、〇〇	一、九六

この影響は直ちに住宅の需給關係に現はれ前期に比して需要は殆んど變動せざりしにかかはらず供給は二倍餘の増加を示し需給關係は殆んど平衡を得るに至つた。

前 期	需 要	供 給	差 引 需 要	供給百に對する需要の比
本 期	八六三	三、六五	四、九七	一、〇
前期百に對する本期の比	八六三	三、六五	四、九七	一、〇

しかも物價家賃は共に低落を示したるに反して賃金のみは依然同率を維持しつつあるのである。即ち賃金労働者の生活はそれ丈容易となりしは當然のことである。

物 價 指 數	前 期	本 期	當 課 調 査
賃 銀 指 數	一〇〇	一〇〇	大阪商業會議所調
家 賃 指 數	一〇〇	一〇〇	本市貸家賃問紹介所調

かかる情勢に在るにもかかはらず依然として住宅難の聲を絶たざるのみならず却つてその聲益々響

しく且つ一層の切實味を帯び來りたるかに感ぜらるるは奇異なる現象といはねばならない。總て現象にはそのよつて來る原因がなければならぬ。今その原因に向つて慎重なる討究を試むるとき吾人は多數の市民が依然として陰慘なる經濟的脅威に呻吟しつつある驚ろくべく亦悲しむべき現實に直面するであらう。

即ち表面平衡を得たるかに思はるる住宅の需給關係も一度その裏面深く解剖を進むるならば其處に多數借家人の經濟的窮迫をあまりにも明らかに見出すのである。

[illegible]

備考
本市貸家貸問紹介所成績による

斯く供給に於いては兩期共に家賃貳拾圓乃至參拾圓未滿のもの、最多數を占めたるも需要に於いては前期の貳拾圓乃至參拾圓未滿のもの、最多を占めしにかかはらず本期は拾圓乃至貳拾圓未滿のもの、第一位に居りその供給に對する率は拾圓乃至貳拾圓未滿のもの、一二倍餘に對して拾圓未滿のものは一七倍餘を示せる事實は借家人の家計の窮迫がその度を高めつつあること従つて家賃に對する要望が漸次低額へと轉向しつつある事の明らかなる反映に他ならないのである。

この當然の結果として家賃に於ける家主借家人兩者の要求の僅少なる不一致のためにも契約不可能に陥り數の上に於いて漸次緩和されつつある筈の住宅難をして實際は却つて益々その激烈さを加へしめつつあるのである。

前期	本期	供給	需要	成立	供給に對する成立の比	需要に對する成立の比
前期	前期	三六五	八六三	一五四	三三	一三
前期	本期	七八五	一、九五	一、九五	五	三
前期	前期	二七	二〇二	一九	六	一七

備考 本市貸家貸問紹介所成績に依る。

備考 本市貸家貸間紹介所成績に依る。

即ち需要數の殆んど増加せざりしにかかはらず供給數が二倍餘の激増振りを示したる際需要に對する成立率に於いて七割七分の増加を見せたるは當然とするも供給に對する成立率の却つて二割二分の減率を來したるは這間の消息を現示するものと言はねばならぬ。しかも多くの借家人が通勤の困難は勿論内職その他に於けるあらゆる不便不利をも忍んで止むなく市の周圍部に流れ出しつつあることを見のがしてはならない。この點に於いて辛くも市の中央部に踏み止まり得たる前期に比してその窮迫のより深刻となりたることを認めざるを得ない。

空家		新築戸數				
舊市	新市	舊市	新市	前期	本期	差引増
六八三	二〇四八	六四七	五九三		八三五	一、四二三
	二、八九四				二、四五一	英六
	減				四、五三	二、三六
					八、四六六	二、六四四

前期百に對する
本期の比

一一三 一二五 一〇六 一〇四

備考

新市とは大正十四年四月一日新に編入されたる市域をいふ。

即ち舊市内にては前期に比して新築戸数は三割二分を減少せるに空家は却つて二割一分を増加したるに反し新市方面にては前者は四割六分を増加しながら後者は僅かに五分の増加を見せたるに過ぎざる事實は前述の事情を雄辯に證明するものである。

且つ又賃銀は低落せずといふもそれは單に現在職業を有して日々の収入を得つつある人々のみに關することにしてその他面に働くに職なき多數の人々のあることを忘れてはならない。前記大正十四年十月一日に於ける失業統計調査の結果は暫く措くも昨年来労働者の解雇率は常時三百名以上の労働者を使用する本市の代表的工場に於いてすら新規雇入率を超過し、しかも退市人員は三十萬人に垂んとする多數を示しつつも尙就職は益々困難を加へつつあることを知らねばならない。

前 期	本 期	雇 入 数	比 率	解 雇 数	比 率
		五九	100	七六	二六
		五四	100	五八	二五
備考 當課調査労働月報資料による。					
前 期	本 期	求 人 数	求 職 数	紹 介 数	就 職 数
		三〇、八〇〇	三九八、七七一	一四七、〇四四	六八、四四八
		一四、一三九	一六七、二五	六三、四九九	二四、九七五
		七	五	六	三
備考 本市職業紹介所成績による。					
前 期	本 期	求 職 数に對 する就職率	紹 介 数に對 する就職率		
		三三	四		
		五	三		
		五	四		

各職業紹介所に於いては刻下の就職難を緩和するため全力をつくして求人先の開拓に將又紹介につ

とめたるにかかはらず前期に比して紹介数に對する就職率は四割七分より三割に求職者數に對する就職率は二割三分より一割五分に低下したのである。

かくて各現象を通じて表面大いに緩和されつつあるかに觀察せらるる經濟的住宅難も精密なる研覈の結果其處に詮方なき經濟問題の尙未だ悲慘にも根強く働き問題は愈々深刻化しつつあることをまざまざと見出すのである。即ち大多數市民は今や將に經濟的住宅難の極點に呻吟しつつあるのである。若し其處に何等かの變調の認むべきものありとするならばそれは外觀的に生計難從つて住宅難の緩和されつつあるかに見ゆる一事のやがて眞乎緩和の來るべき前提と見得ることであらう。

イ 明治四十年頃より不良住宅地域となつた。
 ロ 大正十二年の大震災火災に依り一度焼滅せしも又々不良住宅が建設された。

現 状

イ 戸 数	約 一〇〇	柳島元町	約 九〇
ロ 棟 数	二七〇		四五〇
ハ 人 口	一、三〇〇		二、二五〇
ニ 世 帯 数	三三〇		五〇〇
ホ 面 積	三、五〇〇坪		五、〇〇〇坪

其 九 深川區猿江裏町

沿 革

イ 明治時代の中葉以來不良住宅地域となつた。
 ロ 明治三十六年共同長屋の建設されてよりその地域一層擴大された。
 ハ 大正十二年大震災火災に依り一度焼滅せしも其後又不良住宅建設され現在に至つた。

現 状

イ 戸 数	約 三〇
ロ 棟 数	三六四
ハ 人 口	一、七五〇
ニ 世 帯 数	三七〇

水面 積 一、一六〇坪

○ 大 阪 市

其 一 下 寺 町 廣 田 町

沿 革

イ 細民地區として徳川時代より明治初年にかけて有名であつた長町は現在の日本橋筋三丁目より五丁目間の地域である。
 ロ 元和五年町奉行久具因幡守は南海道に至る要路に當るが故に旅籠十株を許可したるにはじまる。
 ハ 寛文六年十二月所謂新町焼に際し町奉行石丸石見守は道頓堀宗右衛門町、同立慶町及び長町一二丁目に木賃宿百六軒を設けしめ難澁人を收容し彼等をして正業に就かしむると共に犯罪の取締に便した。
 ニ 斯くてこれ等の木賃宿は旅人のみならず日傭人無宿人乞食等の根據地となり漸次細民蜃集し來り却つて犯罪の淵藪となるに至つた。
 ホ このために長町の住民は遂に世間より排斥せらるるに至りたるに依り明治五年該地を日本橋筋と改稱した。
 ヘ 明治十九年長屋建築規則の發布と共に日本橋筋の細民長屋も改築せられたる結果自然細民は裏

町に退くに至つた。

ト 明治二十七八年頃に至つて次第に現今の下寺町附近に長屋が設けられ明治三十一年に市内の木賃宿の整理が行はるるに及んで夫等の宿泊人達はこの地に移動するに至つた。

チ 廣田町の方面は明治三十五年天王寺に博覽會の開かれてより以後に密集地區を形成したるものにして従前は廣田の森と呼ばれ人家も稀なる所であつた。現在の住民は多く府下泉南郡島村の出身者と言はれ古下駄の販賣及び安價なる履物類の製作を内職としつつある。

現 狀

イ 戸 數	一、〇三〇
ロ 世 帯 數	一、三九九
ハ 人 口	五、四九七
ニ 面 積	一〇、六七三五五坪
ホ 主なる集團名	丸三裏 八十軒 新八十軒 八十軒濱裏 島田裏 山内裏 桃木裏 燗的裏 下駄屋裏 豚屋裏 小笠原裏 芋屋裏 鶴屋裏 のり藤裏 竹屋裏 社の裏 荒物屋裏 西六道東裏 五階跡南裏 餅屋裏

(大正十五年八月一日現在天王寺市民館調査)

備考 右の中社の裏(廣田町)は大正十四年八月現在戎警署署の調査によれば實戸數六六、世帯數一〇四、人口四四四を算す

其 二 長 柄

沿 革

イ 現在の長柄は往古の所謂難波長柄の地にして日本書紀に「大化元年冬十二月天皇都を難波長柄

豐崎に遷させ給ふ」とあり。徳川時代には田安家の所領であつて今尚ほ南長柄には陣屋が残存してゐる。

ロ 明治四年田安家より奉還されて東成郡豐崎村の一部となりたるが以後依然として單なる純農村であつた。

ハ 明治十五六年に至り此の地に二三の工場の設立されて以來市内の労働者が次第に集り來りここに不良住宅の集團が形成されはじめた。

ニ 明治三十一年市内の木賃宿整理に當り多數の木賃宿業者は比較的市内に近くして便利なるこの方面に移轉し來り自然労働者行商人等が多數この地に蟄集することとなつた。

ホ 而してこれ等の木賃宿生活者の中にて少々にても生活に餘裕を生じたる者は兎に角附近に一家を構ふるに至り益々不良住宅の増加を招來した。

ヘ 明治四十二年北區の大火に際し多數の罹災者がこの地に流れ込み益々その密集地帯を擴大するに至つた。

ト 大正九年六月長柄葬儀所の創設以來一層下級労働者増加の趨勢を招いた。

チ 南長柄は北長柄に比して一層甚しい不良住宅地區を形成してゐるが全體としてこの地の不良住宅は一大集團をなさずして分散的不良住宅地區を形成してゐることを特徴とする。

現 狀

イ棟 一六八
ロ世帯 五、二〇七
ハ人口 二一、八八四
ニ主なる集團名 二十五軒長屋 百軒長屋 看守長屋 大松箱裏 墓裏 ガチャ裏 本庄三河屋裏

(大正十五年八月現在東淀川區役所調査)

其 三 西 濱

沿 革

イ この地はもと西成郡木津村に屬してゐた。而してその住民は大川(淀川)の岸にある渡邊(今の天満橋附近)に住せしが慶長年間下難波村なる今の幸町邊に集まり大阪天満組に屬し七千五百餘坪の免租地を有してゐた。

ロ その後元禄十一年十月二十二日東成郡野江村に一度替地せられたるが土地低濕なりしを以つて西成郡木津村字七反島に移り更に元禄十四年現在の土地に移り渡邊村と稱した。

ハ 爾來人口増加し該地域のみにては狹隘となりしを以つて更に五千六百餘坪の有租地を得てこれを七瀬新田と稱した。

ニ 明治十二年二月十日前記有租地免租地共に西成郡に編入され二十年には西濱町と改稱し三十年四月一日大阪市に編入今日に至つた。

現 狀

イ戸數 三、一八二
ロ人口 一四、八六七

(大正十四年現在菅原警察署調査)

其 四 今 宮 釜ヶ崎

沿 革

イ 現在市電車庫の南關西線ガードを出て紀州街道に沿ふ南方三四町の兩側に密集するこの地域も明治三十五年頃までは僅かに街道に沿ふて旅人相手の八軒長屋が存在したるに過ぎない。

ロ 其の後東區の野田某氏が始めて労働者向の低廉なる住宅を建設して労働者を收容したるが今日の野田町の起源なるが尙ほ當時に於いても依然として百軒足らずの一寒村に過ぎなかつた。

ハ 以後大阪市の發展に伴ひて下寺町廣田町方面に集喰つてゐた細民は次第に追ひ出されて南下し郊外に安住の地を求め期せずして集團したるが現在の釜ヶ崎にして其處に稻荷町といふ純長町細民部落を形成するに至つた。

ニ 大正五年飛田遊廓の設立ありて無賴の徒無職者及び下級労働者を激増した。

ホ 大正八年今宮警察署の設置當時に於いては不良住宅の密集地域は警察より北に限られるたるが近年に於ける經濟界の不況よりこの地の住民は頗る増加して現在に於いてはその南方一帯の地に擴大するに至つた。

へ この方面に古織利用の小工場三百二十餘も在存してゐることも下級職工勞働者を吸引する一原因である。

ト 街道筋に存在する五十二戸の木賃宿は各地より集まる各種の行商人遊藝人等の巢窟となり附近一帯の住民の生活に甚しい悪影響を與へつつある。

現 狀

イ 戸 口 數	(大正十五年末現在)	
	大正九年	大正十五年
イ 戸	一九、七四二	四七、三二〇
ロ 口	三二、二八二	六三、三八二
	大正八年	大正十一年
	五九、八二〇	七二、四六二
	大正十年	大正十三年
	六七、七〇四	七二、四八七
	大正十二年	大正十五年
	七二、三六〇	

(大正十五年末現在今宮警察署調査)

○ 京 都 市

京都市は他の五大都市に比して大工業が發達してゐないためか所謂近代的意味に於ける不良住宅地帯は見當らない。現在該市に於いて不良住宅地帯と認められつつあるものの總ては古い傳統を有する集團地帯である。従つてその沿革も變遷に變遷を重ねて容易に捕捉すべからざるものがある。殊に當該地夫れ自身の歴史と現住民の來歴とを異にするものもありてその判別には多大の苦心を要する。

各不良住宅地帯現住民の起源或は發端ともいふべきものは往昔天災地變の起る度に諸國の窮民が自

然に清水寺の下五條橋(現在の松原橋)の東に集り清水寺參詣者の喜捨を受けて生活したるにはじまると言はれる。これ等の人々を「坂ノ者」と呼んだ。蓋し清水坂に住したるためであらう。

其の後その一部は祇園の弓弦の製造を職とし且其の祭禮に列し「ユミメソ」と呼ばれたるものもある等諸種の事情に依りてこの「坂ノ者」が各方面に分布し田中町以外の各不良住宅地帯の現住民は總てこの流を汲むといはれてゐる。

沿 革 其 一 東 七 條 町

イ 現在京都驛の東賀茂川に至る一帯の地域をいふ。

ロ この地は天正年間には御料地にして御藏入の地であつたが慶長年間に豊國神社の社領となり元和三年妙法院宮の家領となつた。

ハ 寛文頃までは「坂ノ者」の一部が稻荷町(現在の松原通東洞院因幡藥師の東一帯の地)を中心として附近に集團し或者は東寺に於ける散所法師の如く因幡堂の「キヨメ」即ち掃除夫を勤め或者は雪駄の製造に従事し現在雪駄屋町なる名稱を残してゐる。

ニ 寛文三年市中人家増殖のため市内整理行なはれこれ等の集團は六條河原(現在の松原通と五條通の間の地である。現在の五條通は古の六條坊門にして古の五條通は現在の松原通である)に移された。

14.5
27

昭和三年一月二十日
昭和三年二月一日

大阪市社會部調查課

印刷者 石 西 豐 造
大阪府北區玉川町一丁目一
印刷所 大石堂活版部
大阪府北區玉川町一丁目一
電話七五五
電話七五五